アンラーニングプロジェクト2010前期

2010. 2. 21

生・労働・運動ネット
富山市神通町3-5-3
TEL 076-441-7843
FAX 076-444-6093

ニューズレター

「思考錯語：私・たちと沖縄――私の思い・私の問い」(2/7)での論議から

□沖縄からの「ざわめき」を日本(ヤマト)の私・たちはいかに受け止めるのか？

今、この国の現在の政府による普天間基地移設問題の「先延ばし」を一つの契機として、そこで暮らしを営む人々の意思に反して米軍基地が押しつけられ続けてきた沖縄の「負の歴史」にどのように終止符を打つのかという問いが、再び多くの人々の意識に上りつつあります。それは、単に、一つの米軍基地の移設先をどこにするかの問題に止まらず、沖縄に米軍基地を押しつけることで「平和と繁栄」を享受してきた日本(「ヤマト」)の私・たちとは沖縄にとって何であるのか、また、私・たちはそのような日本(「ヤマト」)と沖縄との関係をどのように変えうるのかという〈問い〉を、立ち上がらせずにはいません。

そうした〈問い〉を豊かに交差させることを通して、沖縄での抵抗・闘いの軌跡から紡ぎ出されてきた「反復帰」・「沖縄自立」の思想と、私たちの〈いま・ここ〉とを接続させたいという思いから、私・たちは、「アンラーニングプロジェクト2010前期企画　私・たちと沖縄――〈と〉のざわめきへ」を企画しました。なお、今回は特別に、アンラーニング09後半期のプログラムの終了の前に、2010年前期企画をスタートさせるという形になりますが、現在のような状況が、そのような進め方に踏み出すことを、私・たちに強く求めているように感じています。

2月7日(日)、アンラーニング2010前期企画の第1回のプログラムとして、表記のような学習会を行いました。今回の学習会は、提起者が、レジメに沿って報告や問題提起を行いながら、参加者にも問いかけていくというスタイルで進められました。以下、そこでの論議のアウトラインを紹介します。(なお、以下の「私」は、提起者自身を指す。)

私のような古い世代の人間にとって、かって、沖縄というところは、そこに行くことはもちろん、それについて考えることさえも、うまくはできないというものとしてあったように思います。60年に、国会議事堂を大衆デモで包囲した「60年安保闘争」があったのですが、その時でも、はたして沖縄のことがどこまできちんと意識されていたのかは、疑問です。

60年安保闘争の最中に、当時のアメリカのアイゼンハワー大統領の訪日に向けた日程調整のために来日したハガティー大統領報道官が、羽田空港で安保反対のデモ隊に囲まれてしまい、アメリカ海兵隊のヘリコプターで「救出」されたということがありました。その報告集会で、当時の学生活動家が、ハガティーは「卑怯にも沖縄に逃げていった」と言ったという有名な話があります。その言葉にも現れているように、沖縄というところは、当時の自分たちにとって、どこか遠いところにある、他所の空間だといった感覚があったのではないかと思います。

その後、60年代末から70年代初頭にかけて、沖縄の日本国家への「復帰」が大きな政治的課題になった時期がありました。アメリカの統治下にあった当時の沖縄では、渡航許可書が必要だったのですが、運動の高揚の中で、アメリカによる占領統治に対する抗議を示すために、沖縄出身の学生たちがその渡航許可書を集団で破り捨てるということがありました。また、その当時、日本本土の様々な政治グループが沖縄を訪れていましたが、その中では、政治的な立場ごとに様々な「復帰」論が唱えられていて、例えば、「反戦復帰」という言い方もありましたし、「沖縄解放」や「沖縄奪還」ということを唱える政治党派もいました。それらのスローガンに対して、「ヤマト」にいる私・たちが軽々しく「沖縄解放」ということを口にできるのか、また、「沖縄解放」と言うが、その場合、沖縄がどこに向かって解放されることになるのか、という「二重」の問いとしてそのことがあるはずだと、当時の自分は考えていました。

「日米合意」でアメリカが日本政府に普天間基地を返還すると約束したことの期限が切れかけているということから、この間、改めて、沖縄の状況が大きく取り上げられていますが、その背景には、米兵による「少女暴行事件」を契機に、90年代半ばから沖縄で米軍基地反対運動が大きく高揚してきたということがあります。それは、かって大田沖縄知事を押し上げた動きや、現在も継続して取り組まれている辺野古でのヘリポート建設反対阻止行動などと、ほぼ重なる動きだと言ってもいいでしょう。普天間基地移設問題をめぐって、今、再び、沖縄では大きな「ざわめき」が生まれていますが、その「ざわめき」が、現在、この国の国家レベルの大きな「政治」と激しく衝突しているように思います。そのような状況に対して、「ヤマト」の私・たちがそれに見合うだけの「ざわめき」をどこまでつくりだそうとしているのかが、今こそ問われているのではないか。そうした思いから、私・たちは、2010年前期のアンラーニングプロジェクトのテーマとして、沖縄のことを取り上げることになりました。

今回の私のレジメの中に、「私・たちの不甲斐のない〈前〉史」と書きましたが、私・たちが08年の洞爺湖G8サミットに反対する共同行動を呼びかけたのが縁となって、「富山平和運動センター」という団体とある種の関係ができています。そこが行っている「憲法フェスタ」というイベントがあり、私・たちも参加を呼びかけられたのですが、そのテーマが、「ありがとう、9条」というものなのです。昨年秋、私・たちがその「憲法フェスタ」に参加した時に、私・たちが憲法を本当に生きようとするならば何が必要か？を考え合いたいということで、森崎東監督「生きているうちが花なのよ　死んだらそれまでよ党宣言」という映画を上演しました。その映画は、「コザ暴動」の後、日本国内を転々とする一組の男女を中心に、日本の辺境部を生きる者たち同士の連帯を描くものです。まさに、沖縄と「ヤマト」の関係を浮かびあがらせるような映画であり、ある意味では、沖縄をめぐる映画だと言ってもいいようなものなのに、その時はそのことをきちんと捉えることができていなかったということが、自分の中に大きな心残りとしてあります。

「ありがとう、9条」と言うぐらいならば、大真面目に、「ありがとう、沖縄」と言ってしまう方がはるかにましでしょう。有名な話ですが、前の天皇のヒロヒトが、終戦後間もない時期にアメリカに対して、「アメリカによる沖縄占領の永続化を望む」というメッセージを発したということがあります。そのように、沖縄のアメリカ占領統治と現行憲法との関係は歴史的にも証明されていることであり、日本が沖縄を切り捨てることによって憲法第1条の天皇規定があり、それと対をなすものとして憲法第9条があるというのは、周知のことではないでしょうか。

かって、沖縄「返還」を間近にひかえた時期に、「沖縄は、米軍の占領統治から、日本の『平和憲法』の下へ帰るんだ」という沖縄の人々の日本「復帰」への期待や幻想に対して、「自分たちをアメリカに売り渡すような国家に帰るのではなく、どの国家にも所属しないものとしての沖縄を創りだそう！」ということを、政治運動というよりも、一つの思想運動として論じた「反復帰論」者と呼ばれる人たちがいます。「ありがとう、9条」といった、平和憲法の「恩恵」の下で自分の今の平和な暮らしがあるといった発想は、結局、沖縄のことを視野に入れていないからこそ、成り立つものだと言わざるを得ません。

この2年数ヶ月間のアンラーニングの企画では、主に、社会的な課題が中心であって、「イラク戦争」や、「政権交代」といった政治的なテーマは取り上げて来なかったのですが、それは、私・たちに

とっては、かなり意図的な選択としてあります。自分にとって、まず最初に来るのは社会的な平面としてどうあるのかということであり、そのことを抜きにして、国家レベルの問題や政治的な課題を取り上げないということを、60年代末からの私のスタンスとしてきました。むしろ逆に、社会的な平面に本当に立った時に、国家というものがどう見えるのかということが、重要なのではないかと考えています。

最近、岩波書店の「世界」の古いバックナンバーに目を通していると、沖縄での社会保障にふれた論文が掲載されていたのですが、そこには、「日本本土の社会保障の貧しさに輪をかけて、沖縄の社会保障は更に貧困だ」という一節がありました。沖縄の生活保護の受給率や失業率はこの国の他の地域と比べて際だって高いのですが、その一方で、現在の社会が失っているような、人間を地域の中に抱え込む力というのは今でも強くもっているように思います。単に軍事・平和問題や、基地問題という枠組みだけではなく、そういった社会的な平面に注目して、沖縄のことを考えたいと思っています。

この数年、この国では、「フリーター」や、不安定雇用労働者といった「保障されざる者」たちの運動が注目されるようになってきましたが、それこそ、沖縄では、それよりずっと前から、米軍基地やその見返りとしての補助金に依存するいびつな経済構造の中で、「フリーター」といった言葉は使わなくても、ずっと失業状態にある人たちが珍しくはなかったわけです。そのように、この十数年間、大きな「生の保障」の破壊にさらされてきた私・たちが、生の深い部分を米軍基地の存在に規定され、貧困を強いられながら生き抜いてきた沖縄の人たちと、「保障されざる者」同士として、どのように新たに出会いなおすことができるのか。そのことが、2010年前期のアンラーニングプロジェクトを企画するに際して、私・たちの大きなモチーフとしてあります。

□橋下大阪府知事「発言」に私・たちはどのように対抗しうるのか？

今回のレジメの「私・たちのさけられない転機――『私・たちと沖縄：おしよせる〈と〉』」の話に移りたいと思いますが、例えば、「私・たちと沖縄」と言うような時に、その時の私・たちというのは、どのような「集合名詞」としてあるのでしょうか。屈折した「問い」ではありますが、私・たちが沖縄のことを考えようとする際に、それは重要なポイントであるように感じていますし、この場の参加者の人たちに、私がぜひ尋ねてみたいと思うことの一つでもあります。

単に日本の47番目の都道府県としてだけ沖縄を捉えるというような人は、今日の参加者の中にはいないでしょうが、私の感じ方からすれば、47の都道府県の中の一つとして沖縄があるというよりも、逆に、沖縄に対してその他の46の都道府県があるという構図なのではないでしょうか。「内地」という言い方が古くからありますが、それは「外地」という言葉と対になっていて、つまり、沖縄を植民地的「外部」と見なす言い方になります。その他に、「本土」という言葉もありますが、沖縄に対して自ら進んで自分のことを「本土の人間」だと言う気にはあまりなれません。これは別に、私が自意識過剰だからということではないのですが、沖縄に対して自分たちのことを言おうとすると、「沖縄とこちら側にいる私・たち」とでも言うしかなくて、本当にとまどってしまうのです。ただ、それは、沖縄の人たちにとっては簡単なことであって、北は北海道から南は鹿児島まで、沖縄以外の全ての地域がひとくくりに「ヤマト」と呼ばれているわけです。

〈と〉という言葉は、「あなた〈と〉私」という「接続」の言葉でもありますし、「国家〈と〉私」というような「対抗」を示すものでもあります。〈と〉というものがどうあるかは時代状況によって変わりますし、沖縄からの「ざわめき」というのは、いわば、「私・たち〈と〉沖縄」という時の〈と〉が、ざわめいているという感じがあります。その時の〈と〉は、どのようなものとしてあるのか。また、普天間基地問題をめぐって、私・たちの側が現政権に対して声を上げていくということがなされていないが、沖縄からの「ざわめき」に対して、私・たちの側からの「ざわめき」をどのように投げ返していくのか。それらの「問い」には、この後も、今回の企画の中で何度も立ち帰っていきたいと思います。

今回のレジメには、橋下大阪府知事の発言を取り上げました。昨年末だったと思いますが、彼は、「沖縄の地上戦は、沖縄の方に多大な負担をかけた」ということで、「米軍基地はできる限り沖縄から負担軽減するのが、沖縄県外の住民の責務ではないか」として、「沖縄の米軍基地負担を全国で分かち合うべきだ」という発言をしています。橋下知事という人の政治家としての評価はともあれ、少なくとも、この発言だけについて言えば、一見、それなりに筋が通っているだけに、この発言に対して、私・たちとしてはきちんと応えないわけにはいかないと思います。

現在、普天間基地移設問題を契機に、沖縄では再び大きな「ざわめき」が生まれていますが、その背景には、日米共同管理の下で米軍基地を押しつけられてきた沖縄の人々の長年にわたる抵抗・闘いの軌跡があります。その一方で、湾岸戦争からのアメリカの軍事力の再編成によって、従来のようにアメリカ国外にいくつもの巨大な軍事基地を配置するということが、必ずしも至上命題ではなくなってきたということもあります。普天間基地の移設は、そうしたアメリカの軍事戦略の転換抜きには決定されなかったと同時に、沖縄の人々の抵抗や闘い抜きにはそのことはなかったというのも確かなことです。そのようなアメリカの軍事戦略の転換と、沖縄の人々の抵抗・反撃とがせめぎあう「渦中」に無自覚なまま、引きずりこまれてしまってうろたえているというのが、この国の現在の政権の姿ではないかと思います。そのことをどう考えるのかということが、私・たち自身にとっても、現在、大きな課題としてあるように思います。

ただ、私・たちとしては、そのような政治的な問題をただ、政治的なこととして考えたいのではなく、現在、日本国家というものがどのように編成されていて、その中である権力関係の下に置かれている沖縄が日本をどう変えたいと考えているのかという「問い」として、そのことがあると思うわけです。私・たちの側も、日本国家の編成原理をどう変えていくのかという「問い」として、そのことを考えていきたいと思っています。私・たちの「生の保障」や社会的な「絆」の破壊・解体の上で成立している日本国家のあり方をどう「こわす」のかという課題と、沖縄での反基地の抵抗・闘いとを相互に結びつけなければならないという思いが、私の中に強くあります。

先ほど、沖縄「返還」前後の時期に「反復帰論」を唱えた人たちがいたという話を少ししましたが、「反復帰論」というのは、一言で言えば、「反国家論」であり、日本国家に「復帰」することで状況が改善されるのではないかという沖縄の人々の意識を変えようとしたわけです。「沖縄に長年、大きな苦難を負わせ続けてきたし、今後もそれを止めないことは明らかな日本に『復帰』して何かいいことがあるのか。現状をちゃんと見ろ。自分たちは別に、そんな日本国家の下に帰る必要などないんだ」ということを主張したわけですが、それは今でも非常に痛烈な問いかけとしてあるように思います。

80年代初頭に、全国の様々な地域で運動をしている人たちが集まって、交流や討論を行う「地域シンポ」という集まりがあり、そこに富山の私・たちも加わっていましたが、およそ10年ほど続きました。その「地域シンポ」の中で、アイヌや沖縄の人たちに対して、それ以外の私・たちは、「ヤマト」としてべったりとした平板なあり方として存在するしかないのか、そうではなく、「ヤマト」の中をもっと多様で多元的なものとして組み立てなおすことはできないのか、といった論議をしていました。

奄美大島に移り住んだ作家の島尾敏雄は、日本というものを日本列島を構成する島々の連なりとして捉え直そうという「ヤポネシア」論を唱えました。「ヤポネシア」というのは、島の連なりとして日本を捉えると同時に、島と島をつなぐ海に注目することで、日本とアジアの国々との連続性までも含めた表現でもあるのですが、それは、日本列島の上に成立している日本国家を相対化するための一つの大事な視点であるように思います。

先ほどの橋下知事の「発言」に対して、私・たちがどう応えるのかという「問い」に戻りますが、私としては、「負担軽減」といった程度の発想ではなく、多元的で自律的な地域の連なりとして、この日本国家を「ヤポネシア列島」にどのように変えていくのかというレベルで私・たちは考えているのだ、ということを突きつけることで、彼の発言に対抗していきたいと思っています。